

論文

優位性に適合する連鎖と線状化された領域からの抽出について

On Superiority-Conforming Chains and Extraction from Linearized Domains

佐藤 英志¹

SATO Hideshi

キーワード: wh 島効果、優位性条件、相対的最小性、循環的線状化

1 序論

本稿の目的は wh 島効果の新たな原理的説明を提案し、その理論的意義を考察することである。wh 島効果を(1)に例示する。

(1) [?]What_i do you wonder [_{CP} who bought _{t_i}]?

(1)の事実は間接疑問文の中から wh 移動ができないことを示している²。

生成文法初期の時代から、wh 島効果を普遍文法的一般原理に還元して説明する試みがなされてきた。例えば、Ross (1967)の wh 島制約、Chomsky (1973)の下接条件、Chomsky (1986)の障壁理論、Rizzi (1990)の相対的最小性、Chomsky (1995)の最小リンク条件、Chomsky (2001)の欠如要素介在制約等が提案されてきた。これらの先行研究の多くは wh 島効果を移動の制約から説明している。これらの試みとは異なり、本稿では wh 島効果を LF における優位性と PF における線状化の相互作用により説明することを提案する。

本稿が採用するのは生成文法理論(とりわけ Chomsky (1995, 2000)以降の極小主義)の基本的原理である。中でも、本稿の議論に特に重要な役割をはたすのが自由併合(Chomsky 2008, 2013)とフェイズ(Chomsky 2001, 2008)である。

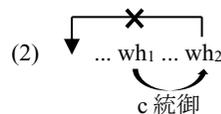
併合は第三要因(内包性条件、改竄禁止条件等)に抵触しない限り自由に適用される³。つまり素性照合や一致などの目的のために駆動するのではない。このような自由併合を連続的に適用することで統語

体がボトムアップ方式で形成される。そして形成された統語体がフェイズ(v*P および CP)単位で Spell-Out され、PF と LF の両インターフェイスで解釈される。さらに本稿では、LF における優位性と PF における線状化を導く原理として、それぞれ Krapova and Cinque (2008)の相対的最小性(以下、RM と略す)と Fox and Pesetsky (2005)の循環的線状化(以下、CL と略す)を採用する⁴。

この論文の構成は以下のとおりである。第2節では優位性について考察する。英語とブルガリア語を具体例として RM の適用を概観する。第3節では、線状化について考察する。連続循環的移動を CL によって導くことを主張する。第4節では RM と CL の相互作用により wh 島効果が説明できることを示す。さらにこの分析の帰結と課題を述べる。第5節で本稿を結ぶ。

2 優位性

優位性とは多重 wh 疑問文における wh 移動の優先関係のことをいう。これを形式化したのが (2)に図示する優位性条件(Chomsky 1973)である。



(2)は非対称的 c 統御関係にある 2 つの wh 句(wh₁ と wh₂)において、上位の wh₁ を飛び越えて下位の wh₂ が移動できないことを表している。

2-1 基本的データの観察

優位性条件は wh 移動のふるまいが異なる言語タイプに横断的に観察される特性である。以下、英語とブルガリア語の優位性を観察する。

2-1-1 英語における優位性

はじめに、英語における優位性条件を観察しよう。

- (3) a. Who₁ t₁ saw what₂?
 b. *What₂ did who₁ see t₂?

英語の多重 wh 疑問文には、1) ひとつの wh 句のみが顕在的に wh 移動し、2) それ以外の wh 句は元の位置に留まる(wh-in-situ)という特徴がある。(3a)では主語 wh 句(who₁)が顕在的に wh 移動して、目的語 wh 句(what₂)が元の位置に留まっている。一方、(3b)では目的語 wh 句(what₂)が顕在的に wh 移動して、主語 wh 句(who₁)が元の位置に留まっている。このとき、what₂ が who₁ を飛び越えて wh 移動している。これは(2)の優位性条件に違反する配列にあり、非文法的である。

2-1-2 ブルガリア語における優位性

次に、ブルガリア語における優位性条件を観察しよう⁵。

- (4) a. Koj₁ kakvo₂ t₁ pravi t₂?
 who what does
 'Who is doing what?'
 b. *Kakvo₂ koj₁ t₁ pravi t₂?
 what who does
 'What is who doing?' (Rudin 1988: 481-482)

ブルガリア語における多重 wh 疑問文には、すべての wh 句が顕在的に wh 移動するという特徴がある。したがって(4a,b)において、主語 wh 句(koj₁)と目的語 wh 句(kakvo₂)の両者が顕在的に wh 移動している。(4a)では kakvo₂ の移動が koj₁ を飛び越えていない。一方、(4b)では kakvo₂ の移動が koj₁ を飛び越えている。これは(2)の優位性条件に違反する配列にあり、非文法的である。

2-2 優位性の説明

本稿では、(2)の優位性条件を導く原理として Krapova and Cinque (2008)の RM を採用する。

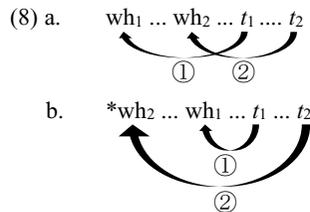
2-2-1 Krapova and Cinque (2008)

Krapova and Cinque (2008)の RM の定義は以下のとおりである⁶。

- (5) (A_1, \dots, A_n) is a chain iff, for $1 \leq i < n$
 (i) $A_i = A_{i+1}$
 (ii) A_i c-commands A_{i+1}
 (iii) A_{i+1} is in a Minimal Configuration with A_i
 (6) Y is in a Minimal Configuration with X iff there is no Z such that
 (i) Z is of the same structural type as X, and
 (ii) Z intervenes between X and Y
 (7) Only a whole chain, not just a link of a chain, counts as an 'intervener'.

(5)-(7)の定義は Rizzi (1990)の RM を応用したものである。Rizzi (1990)の RM との違いは、1) RM が連鎖に課されており、2) 介在要素を連鎖に限定している点である。

以降の議論に特に重要なのは、(5)-(7)の定義が可能な wh 連鎖の関係を規定するということである。すなわち、RM を満たす二つの wh 連鎖は交差状でなければならず、入れ子状であってはならない。これら wh 連鎖の関係を(8)に図示する。



(8a,b)において、基底で非対称的 c 統御関係にある wh 句 (wh_1 と wh_2) の両者が wh 移動している。そして、(8a)では①と②の二つの連鎖が交差している。この場合は文法的になる。これに対して、(8b)では①と②の二つの連鎖が入れ子状になっている。この場合は非文法的になる。

このような連鎖間の関係は以下のように導かれる。はじめに(8a)において、①の連鎖(wh_1, t_1)の間に wh_2 が位置している。これは一見 wh_2 が介在しているように見える。しかし、 wh_2 は②の連鎖(wh_2, t_2)のリンクにすぎない。(7)の定義は、介在要素が連鎖全体であり、個々のリンクではないと規定している。したがって wh_2 は介在要素ではない。また②の連鎖(wh_2, t_2)に t_1 が位置しているが、これも①の連鎖(wh_1, t_1)のリンクにすぎない。したがって t_1 も介在要素ではない。結果的に①と②の二つの連鎖はどちらも介在要素を含まない最小配列である。ゆえに(8a)はRMを満たす。

次に(8b)はどうだろうか。①の連鎖(wh_1, t_1)には介在要素がないので問題がない。しかし②の連鎖(wh_2, t_2)に①の連鎖(wh_1, t_1)が介在している。①の連鎖はすべてのリンクを含む連鎖全体なので介在要素となる。結果的に、②の連鎖が最小配列をなしていない。ゆえに(8b)はRMを満たさない。

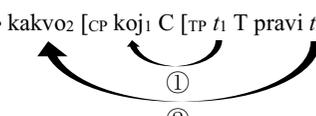
2-2-2 RMの適用(1)

Krapova and Cinque (2008)は以下のようにブルガリア語の優位性を説明する。(4)を(9)として再掲する。

- (9) a. Koj₁ kakvo₂ t₁ pravi t₂?
 who what does
 'Who is doing what?'
 b. *Kakvo₂ koj₁ t₁ pravi t₂?
 what who does
 'What is who doing?' (Rudin 1988: 481-482)

Krapova and Cinque (2008)は、2つのwh句の移動先としてCの多重指定部を仮定する。この仮定に従い、(9a,b)の派生はそれぞれ(10a,b)のように表される。

- (10) a. [CP koj₁ [CP kakvo₂ C [TP t₁ T pravi t₂]]]

 b. *[CP kakvo₂ [CP koj₁ C [TP t₁ T pravi t₂]]]


(10a)において、主語wh句(koj₁)が外側の指定部に、目的語wh句(kakvo₂)が内側の指定部にそれぞれ

移動している。そして①と②の二つの連鎖が交差している。これはRMを満たす(8a)のパターンに該当する。したがって合法的である。

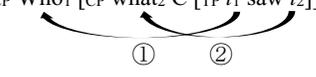
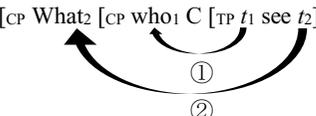
次に、(10b)において主語wh句(koj₁)が内側の指定部に、目的語wh句(kakvo₂)が外側の指定部にそれぞれ移動している。そして①と②の二つ連鎖が入れ子状になっている。これはRMに違反する(8b)のパターンに該当する。したがって非文法的である。

2-2-3 RMの適用(2)

Shlonsky et al. (2020)はRMをLF表示に適用することで英語の優位性条件を説明する。本稿はこの仮説を採用する⁷。Shlonsky et al. (2020)は以下のように仮定している。

- (11) a. Wh-in-situ に非頭在的移動が適用される。
 b. 非頭在的移動は内側の指定部に潜り込む⁸。

(3a,b)を(12a,b)として再掲する。また、それらのLF表示をそれぞれ(13a,b)として図示する。

- (12) a. Who₁ t₁ saw what₂?
 b. *What₂ did who₁ see t₂?
 (13) a. [CP Who₁ [CP what₂ C [TP t₁ saw t₂]]]

 b. *[CP What₂ [CP who₁ C [TP t₁ see t₂]]]


(13a)において who₁ が頭在的に外側の指定部に移動している。そして what₂ が非頭在的に内側の指定部に潜り込むように移動している。ここで①と②の二つの連鎖が交差している。これはRMを満たす(8a)のパターンに該当する。したがって合法的である。

次に(13b)において what₂ が頭在的に外側の指定部に移動している。そして who₁ が非頭在的に内側の指定部に潜り込むように移動している。ここで①と②の二つの連鎖が入れ子状になっている。これはRMに違反する(8b)のパターンに該当する。したがって非文法的である。

3 線状化

本稿の議論で重要な役割をはたすもう一つの概念が線状化である。線状化によって、派生で構築された統語体に線形順序が与えられる。線形順序は派生の出力が PF で解釈されるために必須である。

本稿では線状化の帰結として連続循環的移動に着目する。一般に、wh 移動は埋込節 CP の指定部を經由して移動すると仮定されている⁹。

(14) What_t do you think [_{CP} t_i that Mary bought t_i]?

本稿ではこれをエッジ効果と呼ぶ。エッジ効果を導く原理には Chomsky (2001)のフェイズ不可侵条件(以下、PIC と略す)が広く仮定されている。本稿はこれとは異なり、Fox and Pesetsky (2005)の CL を採用する。

結論を先取りするならば、本稿はエッジ効果の説明原理としての PIC を破棄することを主張する。その理由として、第一に、線状化はインターフェイス解釈に必須であり破棄できない。第二に、後述するようにエッジ効果に関して PIC と CL の余剰性がある。これらの理由から、CL を残存させて PIC を破棄するのが理論の経済性の観点から望ましいと考える。以降の議論では、この見通しで議論を進める。

3-1 PIC とエッジ効果

はじめに、PIC によるエッジ効果の説明を見てみよう。Chomsky (2001)は以下のように仮定している。

- (15) a. Spell-Out はフェイズ主要部の補部に適用される。
 b. Spell-Out された統語体は二度と派生にアクセスできない。

これらの仮定から、PIC が以下のように定義される。

(16) The domain of H is not accessible to operations outside HP; only H and its edge are accessible to such operations. (Chomsky 2001: 13)

はじめに、埋込節内で wh 移動のない派生を想定してみよう¹⁰。(14)における埋込節内の構造を以下に示す。

(17) [_{CP} C [_{TP} Mary bought what_t]]

CP フェイズが完成した時点で、Spell-Out が適用される。この時インターフェイスに送られるのはフェイズ主要部 C の補部 TP である。この時点で what_t には二度と移動が適用できなくなる。なぜなら、Spell-Out された要素は二度と派生にアクセスできないからである。したがって、what_t は決して主節 C 主要部には到達できない。結果として、この段階で派生の破綻が決定的である。

次に、埋込節のエッジに wh 移動する派生を想定してみよう。

(18) [_{CP} what_t C [_{TP} Mary bought t_i]]

CP フェイズ形成の時点で、フェイズ主要部 C の補部 TP が Spell-Out されてインターフェイスに送られる。この場合、what_t はさらなる派生にアクセス可能である。なぜなら what_t はフェイズのエッジにあり、Spell-Out を免れているからである。結果的に what_t は主節に移動できるので派生が収束可能である。

以上のように、エッジ効果が PIC から導かれる。

3-2 CL とエッジ効果

つぎに CL によるエッジ効果の説明を見てみよう。Fox and Pesetsky (2005)は以下のように仮定している。

- (19) a. Spell-Out はフェイズ全体に適用される。
 b. Spell-Out された統語体は再び派生にアクセスできる。
 c. 順序保持(20)が適用される。

(20) Information about linearization, once established at the end of a given Spell-Out domain, is never deleted in the course of a derivation.

(Fox and Pesetsky 2005: 6)

CL を適用することで以下のようにエッジ効果が導かれる。(14)を(21)として再掲する。

(21) [CP₂ What₁ do you think [CP₁ t₁' that Mary bought t₁]]?

はじめに、埋込節内で wh 移動のない派生を想定してみよう。(21)における CP₁ の構造を以下に示す。

(22) [CP₁ C [TP Mary bought what₁]]

(19a)の仮定から、フェイズ完成の時点でインターフェイスに送られるのはフェイズ(CP₁)全体である¹¹。また(19b)の仮定から、Spell-Out 領域に含まれる what₁ が再び派生にアクセス可能である。そして、PFでCP₁に線状化が適用される。線状化によって以下の順序が確定する¹²。

(23) C > Mary > bought > what₁

さらに派生が主節 CP₂まで進む。(19b)の仮定によれば、Spell-Out された統語体も再び派生にアクセスできる。したがって CP₁ が V と併合し、what₁ に再び wh 移動が適用される。最終的に、主節 CP₂ フェイズが Spell-Out される。

(24) [CP₂ what₁ do you think [CP₁ C [TP Mary bought t₁]]]

このように Spell-Out された主節 CP₂ フェイズに線状化が適用される。確定される順序は以下のとおりである。

(25) what₁ > do > you > think > CP₁

この順序は what₁ が少なくとも CP₁ を構成する要素 {C, Mary, bought} に先行することを意味している¹³。これは(23)で確定した順序と矛盾する。したがって、順序保持 (20)の違反となり排除される。

次に、埋込節のエッジに wh 移動する派生を想定してみよう。(21)における CP₁ の構造を示す。

(26) [CP₁ what₁ C [TP Mary bought t₁]]

(26)において、フェイズ(CP₁)全体が Spell-Out される。そして PF で CP₁ に線状化が適用される。その結果、以下の順序が確定する。

(27) what₁ > C > Mary > bought

さらに派生が主節 CP₂の形成まで進む。前述の通り、Spell-Out された統語体が再び派生にアクセス可能である。したがって、CP₁ が V と併合し、what₁ に wh 移動が適用される。最終的に、主節 CP₂ フェイズが Spell-Out される。

(28) [CP₂ What₁ do you think [CP₁ t₁' C [TP Mary bought t₁]]]

そして CP₂ フェイズに線状化が適用される。確定される順序は以下のとおりである。

(29) what₁ > do > you > think > CP₁

この順序は what が少なくとも CP₁ を構成する要素 {C, Mary, bought} に先行することを意味している。これは(27)で確定した順序とは矛盾しない。したがって、順序保持(20)を満たす。結果として、合法的な派生として認可される。

以上のように、エッジ効果が CL から導かれる。

4 wh島効果再考

以降、RM と CL の二つの原理が相互作用することにより wh 島効果が説明されることを示す。加えて、その説明がもたらす理論的帰結と今後の研究課題を述べる。

4-1 wh 島効果の説明

wh 島効果(1)を(30)として再掲する。

(30) ^{??}[CP₂ What₂ do you wonder [CP₁ who₁ t₁ bought t₂]]?

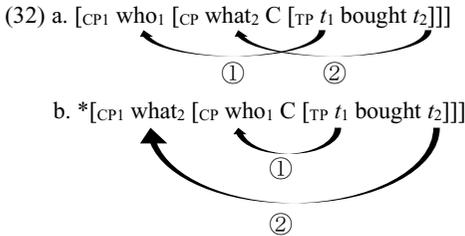
説明の最初のステップとして考慮すべきはエッジ効果である。派生の収束には what₂ が CP₂ の指定部に到達することが欠かせない。そのためには埋込節

CP₁ から抽出されなければならない。第3節で論じたとおり、CP₁ からの抽出はエッジ効果を示す。つまり what₂ は CP₁ のエッジを経由して移動することが必要不可欠である¹⁴。また CP₁ のエッジには who₁ も生起している。言いかえれば、CP₁ が Spell-Out される時点で、who₁ と what₂ の両者が CP₁ のエッジに生起していなければならない。さらに who₁ と what₂ の両者が顕在的に移動するので、CP₁ は以下の二通りのオプションで Spell-Out される。

- (31) a. [CP₁ who₁ [CP₁ what₂ C [TP t₁ bought t₂]]]
 b. [CP₁ what₂ [CP₁ who₁ C [TP t₁ bought t₂]]]

(31a)では what₂ が内側のエッジにあり、(31b)では what₂ が外側のエッジにある。

次のステップは LF でこれらの表示を RM に関して評価することである。(31a,b)の連鎖関係をそれぞれ(32a,b)に図示する。



(32a)では①と②の連鎖が交差している。これは RM を満たすパターンに該当する。これに対して、(32b)では①と②の連鎖が入れ子状になっている。これは RM に抵触するパターンに該当する。したがって、RM を満たす LF 表示は(32a)に絞られる。

以降の派生は(31a)とその LF 対応物である(32a)を基盤にして進むことになる。なぜならば、(31b)はその LF 表示(32b)が RM に違反しているので、この時点で派生の破綻が決定づけられるからである。

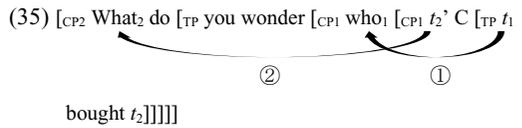
以上の理由から、PF では(31a)を基にして以下の順序が確定する。

- (33) who₁ > what₂ > C > bought

次に、派生が主節 CP₂ の形成まで進んだと想定しよう。このとき、いったん Spell-Out された CP₁ とその内部要素は再び派生にアクセス可能である。CP₁ が V と併合し、what₂ に wh 移動が適用される。そして以下のように CP₂ フェイズが Spell-Out される。

- (34) [CP₂ What₂ do [TP you wonder [CP₁ who₁ [CP₁ t₂' C [TP t₁ bought t₂]]]]]

LF ではこの表示が RM にさらされる。(34)の連鎖関係を(35)に図示する。



この表示において、①の連鎖(who₁, t₁)と②の連鎖(what₂, t₂')が交差している。これは RM を満たすパターンに該当する。したがってこの派生は合法的であり、LF には何も問題がない¹⁵。

次に PF ではどうだろうか。CP₂ フェイズが Spell-Out され、線状化が適用される。その結果、以下の順序が確定する。

- (36) what₂ > do > you > wonder > CP₁

これは what₂ が少なくとも CP₁ 内の要素{who₁, C, bought}に先行することを意味しており、(33)で確定した順序に矛盾する。つまり、(33)において who₁ が what₂ に先行し、かつ(36)において what₂ が who₁ に先行するので、順序保持(20)に抵触する。

このように、wh 島効果を示す文の派生は RM と CL の両方の原理を同時に満たすことができず、非文法的なものとして排除される。以上のように RM と CL の相互作用から wh 島効果が説明される。

4-2 帰結

ここまで、wh 島効果が RM と CL の相互作用により説明できることを主張してきた。この分析はいくつかの理論的帰結をもたらす。

4-2-1 wh 島効果の修復

Sluicingと呼ばれる削除構文に関して、wh 島効果と優位性条件の文法性の対比が指摘されている(Boeckx 2008, Boeckx and Lasnik 2006 等)。Sluicingを適用することでwh 島効果は(37)に例示するように文法性が回復する。一方、優位性条件違反は(38)に示すように文法性が回復しない。

- (37) a. *?Which book₁ did every journalist go out today to find out who was selling t₁?
 b. Every journalist went out today to find out who was selling a certain book, but I don't know which. (Boeckx 2008: 140)
- (38) a. *I couldn't tell you what₂ who₁ brought t₂ to the potluck.
 b. *Everyone brought something (different) to the potluck, but I couldn't tell you what who. (Merchant 2001: 113)

本稿の分析が正しければ、この対比が自然に説明できる。SluicingをPFにおけるTP削除(Merchant 2001)と仮定するならば、(37b)は以下のようなPF表示で表される¹⁶。

- (39) ..., but I don't know [CP₂ which₂ (book) C [TP every journalist went out today to find out [CP₁ who₁ t₁ was selling t₂]]]

本稿の分析では、wh 島効果はCP₁における線形順序とCP₂における線形順序の矛盾が原因であった。しかし、PFにおいてSluicingを適用することで問題の発生源であるCP₁の構造が完全に削除される。つまり問題とされた矛盾がすべて帳消しになる。したがって線状化の矛盾が回避され、文法性が回復すると説明できる。

では次に、優位性条件違反の場合はどうだろうか。(38b)のPF表示を以下に示す。

- (40) *..., but I couldn't tell you [CP what₂ who₁ C [TP t₁ brought t₂ to the potluck]]]

本稿の分析では優位性条件はLFにおけるRMに帰する問題である。したがってPFで削除を適用しても、LFでのRM違反を回避することはできない。LFでは連鎖(who₁, t₁)が連鎖(what₂, t₂)の間に介在しているので、LFでRMに違反する。このRM違反はPFで帳消しにすることはできない。結果的に、優位性条件違反は文法性が回復しない。

4-2-2 wh 島効果の消失

本稿の分析はwh 島効果に関して興味深い予測をする。以下のような派生を考えてみよう。

- (41) [CP₁ wh₁ [CP₁ wh₂ C [TP t₁ T [VP V t₂]]]]

(41)において、二つのwh句(wh₁とwh₂)はCPの多重指定部に位置することでエッジ効果を満たしている。そしてCP₁がSpell-Outされることで、LFでは連鎖(wh₁, t₁)と連鎖(wh₂, t₂)の関係がRMにさらされる。ここでは二つの連鎖が交差するのでRMを満たす配列にある。さらにCP₁に線状化が適用されることで、以下の線形順序が確定する。

- (42) wh₁ > wh₂ > C > T > V

ここまでの議論では(41)に後続する派生としてwh₂が主節に移動していた。そしてこれが線状化の問題(埋込節の線形順序と主節の線形順序の矛盾)を引き起こしていた。しかし、もしwh₂の代わりにwh₁が主節に移動したらどうなるだろうか。この派生を以下に示す。

- (43) [CP₂ Wh₁ C [TP ... T [VP ...V [CP₁ t₁' [CP₁ wh₂ C [TP t₁ T [VP V t₂]]]]]]?]

連鎖(wh₁, t₁')の間にはwh連鎖が介在していない。従ってLFではRMに何も問題がない。さらに主節CP₂に線状化が適用されることで、以下の線形順序が確定する。

- (44) wh₁ > C > T > V > CP₁

5 結論

ここでは wh_1 が少なくとも CP_1 内の $\{wh_2, C, T, V\}$ に先行することを意味する。つまり CP_1 における順序 ($wh_1 > wh_2$) と CP_2 における順序 ($wh_1 > wh_2$) が矛盾しない。したがって、(43a) の派生は CL と RM ともに満たしていることになる。

つまり、このような環境において wh 島効果が消失することが予測される。本稿ではこれを反 wh 島効果と呼ぶ。この予測は、以下のブルガリア語の事実から裏付けられる。

- (45) a. *Kogo₂ se opitvat da razberat koj₁ t₁ e ubil t₂?
 whom SELF try to find out who AUX killed
 ‘Who is trying to find out who killed?’
 b. Koj₁ se opitvat da razberat kogo₂ t₁ e ubil t₂?
 who SELF try to find out whom AUX killed
 ‘Who is trying to find out whom killed?’
 (Richards 2001: 27)

(45a) が wh 島効果に相当する。つまり埋込節指定部に主語 wh 句が生起し、主節 CP 指定部には埋込節から抽出された目的語 wh 句が生起している。これは英語と同様の理由で wh 島効果として排除される。興味深いのは(45b)である。ここでは埋込節 CP 指定部に目的語 wh 句が生起しており、主節 CP 指定部には埋込節から抽出された主語 wh 句が生起している。これは反 wh 島効果に該当する。

4-2-3 今後の研究課題

以下、今後の研究課題を述べる。第一に、英語に反 wh 効果が存在しない理由を明らかにする必要がある。英語において(45b)に対応する構文は非文法的である。

- (46) *[_{CP2} Who₁ do you wonder [_{CP1} what₂ t₁ bought t₂]]?

この事実は、多重 wh 移動に関与する原理とパラメーターを反映していると考えられる。第二に、RM は依然として記述的である。これを第三要因から演繹して導く必要がある。これらの問題を解決する鍵として、ラベリング (Chomsky 2013, 2015) のシステムが関与している可能性がある。今後、このシステムとそれに関与するパラメーターの精緻化が求められるであろう。

以上、本稿では極小主義の枠組みで wh 島効果の新たな原理的説明とその理論的帰結を考察した。本稿では説明原理として Krapova and Cinque (2008) の RM と Fox and Pesetsky (2005) の CL を採用した。RM により wh 連鎖が入れ子状ではなく交差状でなければならず、また CL により線形順序が保持されなければならない。wh 島効果が現れる環境ではこれら二つの原理を同時に満たすことができなくなる。wh 島効果は、まさにこの点に帰することを論じた。さらに本稿の主張は、Sluicing による wh 島効果の修復 (および優位性条件との対比) に加え、wh 島効果の消失 (反 wh 島効果) も説明することから経験的に支持されることを論じた。最後に、多重疑問文に関するラベリングのシステムとパラメーターの精緻化が求められるとの研究課題について言及した。

謝辞

本稿の執筆にあたり、多くの方々のご教示、ご支援を賜りました。この場を借りて、心から感謝の意を申し上げます。

References

- Abels, Klaus (2003) *Successive Cyclicity, Antilocality, and Adoposition Stranding*, Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Boeckx, Cedric (2008) *Understanding Minimalist Syntax: Lessons from Locality in Long-Distance Dependencies*, Blackwell, Oxford.
- Boeckx, Cedric and Howard Lasnik (2006) "Intervention and Repair," *Linguistic Inquiry* 37, 150-155.
- Bošković, Željko (1997) "On Certain Violations of the Superiority Condition, AgroP, and Economy of Derivation," *Journal of Linguistics* 33, 227-254.
- Bošković, Željko (2002) "On Multiple Wh-Fronting," *Linguistic Inquiry* 34, 351-383.
- Chomsky, Noam (1973) "Conditions on Transformations," *A Festschrift for Morris Halle*, ed. by Stephen Anderson and Paul Kiparsky, 232-286, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Chomsky, Noam (1977) "On Wh-Movement," *Formal Syntax*, ed. by Peter Culicover, Thomas Wasow and Adrian Akmajian, 71-132, Academic Press, New York.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essay in honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Carlos P. Oteo and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/ Philadelphia.
- Fox, Danny and David Pesetsky (2005) "Cyclic Linearization of Syntactic Structure," *Theoretical Linguistics* 31, 1-45.
- Huang, C. T. James (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Krapova, Iliyana and Guglielmo Cinque (2008) "On the Order of Wh-Phrases in Bulgarian Multiple Wh-Fronting," *Formal Description of Slavic Languages: The Fifth Conference, Leipzig 2003*, ed. by G. Zybatow, L. Szucsich, U. Junghanns and R. Meyer, 318-336, Peter Lang Publishing, Frankfurt, Germany.
- McCloskey, James (2000) "Quantifier Float and Wh-Movement in an Irish English," *Linguistic Inquiry* 31, 57-84.
- Merchant, Jason (2001) *The Syntax of Silence*, Oxford University Press, Oxford.
- Richards, Norvin (2001) *Movement in Language: Interactions and Architectures*, Oxford University Press, Oxford.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Rizzi, Luigi (2017) "Comparing Extractions from Wh-Islands and Superiority Effects," *Festschrift für Marin Prinzhorn*, ed. by Clements Mayr and Edwin Williams, 253-261, Wiener Linguistische Gazette 82.
- Ross, John Robert (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.

- Rudin, Catherin (1988) "On Multiple Questions and Multiple Wh-Fronting," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 445-501.
- Shlonsky, Ur, Sandra Villata, and Julie Franck (2020) "Covert Movement in Multiple-Wh Questions: Experimental and Theoretical Investigations," *Syntax* 23, 185-202.
- Torrego, Esther (1984) "On Inversion and Some of Its Effects," *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.
- Villata, Sandra, Luigi Rizzi, and Julie Franck (2016) "Intervention Effects and Relativized Minimality: New Experimental Evidence from Graded Judgments," *Lingua* 179, 76-96.

注

- ¹ 新潟県立大学国際地域学部 (hidesato@unii.ac.jp)
- ² wh 島効果は他の島効果 (Huang 1982) に比べて弱い非文法性を示す。これについては今後の研究課題とする。
- ³ 本稿では移動のコピー理論を仮定する。つまり、内的併合で形成される連鎖要素はすべて同一のコピーである。本稿では、説明の便宜上、連鎖の先頭部以外のコピーを痕跡で表記する。
- ⁴ Krapova and Cinque (2008) の RM と Rizzi (1990) の RM の違いについては第2節で言及する。
- ⁵ ブルガリア語の優位性条件に関しては、Rudin (1988), Bošković (1997, 2002), Richards (2001) 等を参照のこと。
- ⁶ Rizzi (2017) もこの定義を採用している。
- ⁷ 近年、英語の優位性に関して Rizzi (2017), Villata et al. (2016) 等が議論を展開している。
- ⁸ 潜り込み (tucking-in) については Richards (2001) を参照のこと。Rizzi (2017) は非顕在的移動が素性移動 (Chomsky 1995) であると仮定している。
- ⁹ Abels (2003), Chomsky (1977), Torrego (1984), McCloskey (2000) 等を参照のこと。
- ¹⁰ 第1節で述べたとおり、本稿は自由併合を仮定する。したがって、併合は他の要因が強制しない限り自由である。

- ¹¹ 実際の派生には v*P フェイズが関与する。しかし本稿では、説明の便宜上、これを省く。
- ¹² 任意の要素 A と B において、「A > B」は「A が B に先行する」ことを表している。
- ¹³ この時点では、CP₁ 内に生起する what₁ のコピーは音韻素性が欠如している。したがって、線状化には見えない。結果的に what₁ > what₁ という同一コピーの順序関係は発生しない。
- ¹⁴ CP₁ のエッジには wh 句が一つしか生起できず、それが介在性効果をもたらすと反論があるかもしれない。しかし、自由併合の仮説に従えば、多重指定部そのものは原理的に許される。したがって、この反論は成立しない。エッジ効果を示す wh 句が複数ある場合、ラベリング (Chomsky 2013, 2015) が問題となるが、これについては今後の研究課題とする。
- ¹⁵ Rizzi (2017) 及び Villata et. al (2016) は Krapova and Cinque (2008) の連鎖条件が同一節内の連鎖に限定されると分析している。本稿はこの分析は採用せず、節をまたぐ連鎖にも RM を適用すると仮定する。
- ¹⁶ Sluicing の適用により PF で削除される部分を網掛けして示す。